

優秀賞

僕たちが守るべき水

僕は、朝起きてトイレに行き体を軽くしてから、健康のためにコップ一杯の水を飲むのが日課です。朝食の後は歯磨きをして、ぬるま湯で寝癖を直します。大好きな学校に行くまでの間にも、様々な用途で水を使います。僕の学校はすぐそばに海があり、海洋教育を特色としているため、水との関わりが深く水に恵まれた環境だと思っていました。しかし、よく考えてみると、海水は生活用水には使えないことに気づき、逗子市の水はどこから来ているのか興味がありました。

調べてみたところ、逗子市の水は主に二つの大きな河川から取水されていることがわかりました。一つは相模川水系、もう一つは酒匂川水系です。相模川の水は寒川取水堰を通り、寒川浄水場に運ばれます。いくつもの処理工程を経て安全で良質な水がつくられ、逗子市などの様々な地域の蛇口に届けられています。日本の水道水は、細菌や有害物質の基準が法律で厳しく定められているため、日本は「水道水がそのまま飲める国」として世界的にも知られています。

逗子市に水を供給している浄水場の一つである、寒川浄水場の近くにある神奈川水道記念館を見学しました。特に印象に残ったのが「神奈川に水道がやってきた」の映像で、日本で最初に鉄管を使った近代水道がひかれたのは神奈川県であることを知りました。現在のような水道管が整備される前は、井戸や川で水をくんで風呂などに使っていて、大変な労働でした。汚れた水が原因で病気になることもあり、飲み水は水屋から水を買って飲んでいたそうです。昔は水がとても貴重であったため、お土産にしていたと聞き、今の生活では考えられないと驚きました。

浄水場に必要なお水を河川から取り入れるために、水位を調整する役割をもつのが取水堰です。五月の連休、神奈川水道記念館でもらったダムカードに載っていた寒川取水堰を訪ねてみました。そこには、たくさん白い鳥が集まっていました。よく見てみると、水面に無数の魚が水の

流れに逆らって飛ぶように泳いでいて、その魚を白い鳥が捕えています。ダムカードの解説から、鮎をはじめ、ウグイやカニなど多くの生き物のために魚道が設置され、生まれた川へ戻るよう工夫されていることを知りました。その取り組みの結果、相模川は鮎をはじめとする多くの生き物が生息する、豊かな水系になりました。このことから、人の手で適切に管理することの大切さを学びました。

現在、三十年に一度の少雨の影響で全国的に水不足の心配が高まっており、神奈川県ではダムの貯水量が低下するなどの影響が出ていて、節水を呼びかける報道もされています。僕はこのような事態になるのは初めてなので、生活がどれくらい変わってしまうのだろうと不安な気持ちになります。節水とは、水をむだにせず大切に使うことですが、日々の生活では水を汚さないということも大切になってきます。そのために料理の後片付けの際に、読み終えた新聞紙で油污れを拭い去ってから洗うことや、環境にやさしい洗剤を使うことを心掛けるなど、自分にできることを考えて、実行していくことが大切だと思います。

学校から見える海は、日の光を浴びるとコバルトブルーに輝いていて、その景色を見ると新鮮な気分になります。その海には、逗子市の生活排水が下水処理施設を通じて流れ込んでいます。下水処理施設のおかげで、多くの生き物が住むきれいな海が保たれています。しかし、処理できる水の量には限りがあるため、普段から水を汚さないよう配慮する必要があります。無限に広がる青い海は、水質を守ってきた人々の努力のたまものです。この海の美しさを保てるかは僕たちの水に対する意識と取り組みにかかっていると思います。